

2013 年度鳥類のレッドリスト： 絶滅危惧 I A 類の種数が最高になった



クロアシアホウドリは個体数が増加した結果、2013 年度版レッドリストで降格された
写真提供： Ben Lascelles

報告者： Martin Fowlie

日時： 2013 年 11 月 26 日(火)

バードライフ・インターナショナルから発表された鳥に関する今年のレッドリストでは、絶滅危惧 I A 類の種数がこれまでにない数に達しました。

サハラ砂漠以南に生息する目立たない鳥‘ハジロシマクイナ’（和名未定につき仮称）は増え続ける絶滅寸前の種のリストに最近加わりました。湿地の排水工事、農業用地への転換、水の汲み上げ、家畜の過剰放牧、湿地の植物の刈り取りなどを含む本種が生息する高地の湿地性草原の破壊と劣化がこのような危惧される状況を招いたのです。本種の生態をより理解し、これらの脅威に対処し、絶滅から救うためにエチオピアと南アフリカでの緊急な活動が必要になっています。

「およそ 200 種の鳥が永遠に失われてしまう本当の危機に今あるのです。」とバードライフの科学・政策・情報部門の部長レオン・ベナン博士は言いました。「彼らは複数の分野で被害を受けて

います。生息地の喪失、農業の変化、外来種、気候変動などが主な脅威です。このような問題が放置されればレッドリストは今後も長くなって行くでしょう。」

‘絶滅危惧 I A 類’とは IUCN(国際自然保護連合)の絶滅危惧種のレッドリストで最高度の危惧がある、野生状態で極めて高い絶滅の恐れに直面しているカテゴリーです。

シマアオジはその越冬地である中国南部と東南アジアでの野放図な罾猟により最近の数年間で壊滅的に数が減っています。2000 年には‘軽度懸念’のカテゴリーにリストされていたこのかつては普通種だったシマアオジは過去 10 年の間だけで 3 回も格上げされ、現在では‘絶滅危惧 I B 類’と考えられています。このカテゴリーは次に‘絶滅危惧 I A 類’に加えられる一歩手前の状態です。

けれども、保護活動がうまく機能している良いニュースや良い兆候もあります。

これ以上の絶滅を防ぐには幾ら必要か？

2 種のアホウドリ類：地球上の鳥の科の中でも最も危惧されるアホウドリ類のうちの 2 種が個体数の増加により絶滅の危惧が低くなったと考えられています。

「マユグロアホウドリとクロアジアホウドリの 2 種はレッドリストの低いカテゴリーに格下げされました。」とバードライフの‘世界の種部門’の担当者アンディ・サイムズは言いました。「まだ行く手は完全に定まったわけではありませんが、このことは他のアホウドリ類の運命も好転させる大きな希望を与えてくれたのです。」

「アホウドリ類への主な脅威は漁業における混獲によるものですが、現在世界中で多くの延縄と底引き網漁の船が殺される鳥の数を減らすべく努力をしています。もしこの状況を続けて行くことが出来れば、クロマユアホウドリとクロアジアホウドリが未来へのトレンドを定めてくれるという本当の希望があるのです。」

インド洋の島ロドリゲス島ではロドリゲスアカガオハタオリとロドリゲスヤブセンニューの 2 種が保護活動の結果格下げになりました。水源地保全の必要から促進された生息地の保全と森林再生が、近年壊滅的なサイクロンの襲来がなかったことにも助けられて、これらの種の復活の鍵となったのです。多くの森林再生では外来の樹木が含まれていますが、幾つかのサイトでは元々の生態系の復旧も始まっています。これらの場所では草食動物や木こりが入らないようフェンスが設けられ、外来植物は除去される一方で在来植物の移植が行われ、また一般の人たちの関心を高めるキャンペーンも行われました。

「今年のレッドリストには良いニュースと悪いニュースが混じり合っています。けれども、世界中の保護活動グループが種を守り絶滅を防ぐことに成功していることを示しています。そしてこのような献身的努力を大幅にスケールアップすることが今必要なのです。」とベナン博士は締めくくりました。